

# 中山胡民作寿字盃について

宮武慶之

## 論文要旨

現在、木村茶道美術館では蒔絵師中山胡民（一八七〇没）作の盃を所蔵する。盃には寿の文字が蒔絵され溝口直諒（一七九九―一八五八）の六十賀祝の品として作られた。調査から寿の文字は、直諒の学書の師である平林淳篤の筆であることがわかった。

直諒と胡民の直接的な関係は確認できないが、両者に関係した人物では、江戸時代後期に活躍した江戸の町人数寄者吉村観阿（一七六五―一八四八）と妻観勢がいる。観阿は溝口家に多くの道具を取次いでいた。また観勢は溝口家に胡民作盃を献上していた。このほか観勢は胡民に依頼して「立鶴蒔絵香合」を百個作成依頼していた。先行研究において胡民の交友関係などは明らかにされていない。そこで本稿では寿盃の制作背景を胡民と観阿夫妻の関係から論じ、その交流を明らかにする。

キーワード【中山胡民 吉村観阿 吉村観勢 溝口直諒 原羊遊斎】

## 一 はじめに

現在、木村茶道美術館では中山胡民作の寿字盃を所蔵する。この盃には新発田藩十代藩主溝口直諒（翠濤、健斎、退翁／一七九九―一八五八）による寿の文字が蒔絵される。また北方文化博物館でも直諒による寿の蒔絵が施された胡民作の盃を所蔵している。いずれも直諒の六十賀の祝いの品として作成されたものである。

胡民は『原色茶道大辞典』（淡交社、二〇一〇）では「文化五年―明治三年（一八〇八―七〇）武蔵国葛飾郡寺島村の人中山金右衛門の子で、通称は祐吉。幼時に江戸に出て原羊遊斎の門下となり、精巧な蒔絵で知られた。のち法橋となって泉々と号した。江戸では両国矢の倉に住み、明治二年今戸に移った。代表作は「虫籠蒔絵菓子器」。門人に小川松民がいる。」として紹介されている。胡民の作品は美術館や博物館などに多く残されているものの、先行研究におい

て胡民の交流は明らかにされていない。

木村茶道美術館蔵品の寿の文字に注目すると、直諒が還暦を迎えた安政五年元旦に書かれた試筆と類似しているものの検討を要する。直諒は同年六月十八日に没しており、胡民に盃を依頼した時期および製作を依頼した背景について同年の直諒の行状から検討する。

直諒と胡民について直接的な関係を明らかにする資料は確認できていない。そこで間接的にどのような人物が関係したのかについて検討するため東京大学史料編纂所が所蔵する溝口家史料に注目する。同史料から直諒と交流の深かった江戸の町人数寄者吉村観阿(白醉庵／一七六五—一八四八)と妻観勢の記述がみられた。観阿は青年期に松平不昧、後年には溝口直諒と親しく交流し、両家のコレクション形成に貢献した人物である。<sup>1)</sup> 観阿は胡民の師である原羊遊斎(更山／一七六八—一八四五)との関係が深い人物であることは従来知られていた。今回、妻の観勢が年賀の品として溝口家に胡民作の盃を献上していたことが判明した。また胡民と観勢の関係を検討するにあたり現在、個人が所蔵する胡民作「立鶴蒔絵香合」にも注目する。

以上の点に注目した場合、観阿と羊遊斎、観勢と胡民は作品制作を通じた交流が確認でき、その延長で胡民と直諒との関係があったと考えられる。

本稿では寿盃の制作背景を、観勢と胡民の関係から論じ、その交流の一端を明らかにしたい。

## 二 胡民作寿字盃と製作背景

溝口直諒とは『茶道大辞典』(淡交社、二〇一〇)によれば「新発田藩主。溝口直侯の嫡子。幼名は駒之助、字は益卿、号に健斎・景山・東籬等がある。佐久間象山に師事。従五位下伯耆守・信濃守・勅使接待役を務める。阿部求巴に就いて石州流の茶道を学び、狂歌にも長じた。安政五年(一八五八)歿、六十才。」として紹介される。現在、木村茶道美術館が所蔵する盃には寿の字と霞が金蒔絵される(図1)。盃の背面には同じく金蒔絵で

安政戊午

初夏上浣

六十賀

退翁(花押)

とあり、また高台(図1—2)には金蒔絵で

胡民

とある。盃を収納する箱の甲部には

壽字杯

とあり、裏には直諒により次のような墨書(図1-3)がある。

安政戊午

六十賀造

退翁書(花押)

退翁とは直諒が名乗った号であることから直諒が安政五年の六十賀(還暦)を記念して胡民に作成させた盃であることがわかる。

このような直諒の寿の文字を蒔絵した胡民作の盃では、ほかに北方文化博物館の所蔵品がある(図2)。北方文化博物館所蔵品の寿の文字は異なっているが胡民の作であり、盃の裏には金蒔絵で次のように書かれている(図2-2)。

安政戊午

六十賀

退翁(花押)

本品も六十賀に際して作成されたことがわかる。また箱甲書および箱裏の直諒による墨書の記述は先にみた木村茶道美術館藏品と同一である。

以上のことから、木村美術館所蔵品と北方文化博物館藏品はいずれも直諒の還暦の祝に胡民に依頼して作成された盃であることがわかる。

直諒の筆跡は盃の裏側にもみるように定家様である。木村茶道美術館の盃表に金蒔絵された「寿」の文字は一体、誰の筆になるものであろうか。そこで現在、個人が所蔵する溝口直諒筆大字「寿」(図3)に注目してみたい。背面から確認すると一枚漉きの紙であることがわかる。表具をみると、一文字は紙に金銀箔を散らしたもので、風帯も同様である。上下は浅い萌黄色の北絹で二段表装となっている<sup>②</sup>。

表題に寿と書き、以下に賛文を書いたもので、落款には

安政戊午元旦

とある。付属品は軸を収納する箱のみで、直諒による墨書が確認され、箱甲部には「寿大字」とあり、箱裏には次のような記述がある。

安政五戊午正月 六十翁健齋試筆 匣記退翁自書

以上の記述から、この大字は安政五年の元旦試筆として書かれたことがわかる<sup>③</sup>。溝口家の掛物蔵帳である『御掛物帳』(新発田市立図書館蔵)中、「御筆物之部」では

一 直諒公御筆 寿字

とあり本幅と合致することから溝口家の旧蔵品である。ただし、溝口家の旧蔵品を示す「碧雲山房蓄蔵物品」の蔵印はない。

直諒筆大字「寿」の為書には次のような記述がある。

余嘗藏平林淳篤八  
十八歳所書壽一字  
大筆淳篤者余幼時  
学書之師也壯歲以  
来好学小堀宗甫之  
書風今茲登六表將  
開寿筵因臨之且欲  
以加撰養保天年云

記述から直諒の幼年時代の学書の師は江戸の書家平林淳篤であることが判明する。<sup>(4)</sup> その淳篤が八十八歳の時に書いた寿の一字を直諒は所持していた。この掛物について先出の『御掛物帳』をみると「雑之部」には

一 寿之字 淳篤筆

とあり、同定される。また、その詳細については直諒が隠居後に過ごした新発田藩中屋敷幽清館の雑記である『幽清館雑記(十)』(東京大学史料編纂所蔵)に次のような記述がある。

直幅壽字淳篤書  
平林淳篤者余幼時学書之師也嚮文  
化四年丁卯有八十八之賀因書壽一  
大字而齋來贈余也受而藏焉近日偶  
得之于文庫中展玩之則不為虫鼠所  
毀傷其墨色淋漓如新也距今四十五  
年是亦壽哉因有感焉想于今再不可  
得之故裝潢而掛于居室之壁間盖寓  
不忘為師之意耳嘉永辛亥仲冬  
圓齋退翁識並書<sup>(5)</sup>

この文書は嘉永辛亥すなわち嘉永四年(一八五二)の仲冬、直諒四十五歳の時に書かれたものである。かつて幼いときの学書の師であった淳篤が八十八の祝いときに書いた「壽」大字を所蔵していた。虫干しの際に、久しぶりにみてその思いを記録したものである。長い間、蔵に所蔵され表装が傷んでいたため修理して、居室に掲げたことが述べられる。

(4)

盃に蒔絵された寿の文字を先述の北方文化博物館藏品と比較してみると画数は同一に書かれているが、起筆と終筆が異なっている。この点から、金蒔絵された寿の文字は、淳篤筆の寿と判断される(図4)。すなわち木村茶道美術館所藏品は『御掛物帳』に所載されたもの淳篤八十八の時書かれた寿を原本として、盃に蒔絵がなされたものである。このことから胡民に依頼した時期は安政四年ごろと推定される。

直諒は壮年期に小堀遠州の書風に関心が高く、好んで書くようになった。直諒筆の書体は、藤原定家が得意とした定家様である。寿の書体が異なるのは淳篤の筆意に因んだためである。還暦を迎え、今後は健康を維持し茶の湯にまい進する意気込みが伺える。<sup>(6)</sup>

安政五年の元旦試筆で、今後は寿筵を開くことを述べている。この寿筵とは六十賀の宴席であったことが想像されるが、どのようなものであったのであろうか。そこで安政五年の直諒の行状に注目してみると、『御掛物帳』中、「雑之部」に次のような記述がある。

一 小堀宗中自詠倭哥色紙

安政五年戊午四月十五日持参<sup>(7)</sup>

小堀宗中(遠州茶道宗家八世/一七八六—一八六七)は、直諒と親交の深かった人物である。同家の所藏品の鑑定や箱書等をしており、また直諒の茶会にも招かれている。元々、小堀家と溝口家は直

接的な関係はないものの、かつて小堀家三代正恒(一六四九—一六九四)没後に、同家伝来の道具五種を縣宗知(一六五六—一七二二)が仲介して、新発田四代藩主重雄(悠山/一六三三—一七〇八)が購入していた。『アート・リサーチ(第十四号)』では、直諒の文政十三年の茶会で、小堀家から入手した五種うち二種の道具、すなわち「閑極法雲東潤道洵両筆墨蹟」(個人蔵)、瀬戸茶人「蛭」(中興名物。畠山記念館蔵)を使用した茶会に宗中を招き、小堀家と溝口家の歴史を再確認する茶会であったことを明らかにした。<sup>(8)</sup>このほか両者の合作による「閻魔大王図」、「地藏菩薩図」(双幅。遠州茶道宗家蔵)や、直諒の号である翠濤の典故となった鬮茶歌の一節を宗中が書いた「緑雲翠濤」(個人蔵)<sup>(9)</sup>が存在するほか、直諒と宗中による合作「富士絵讃」(図5。BSN新潟放送蔵)があり、その交流は深かったことがわかる。<sup>(10)</sup>

ここで改めて『御掛物帳』に注目してみると宗中は直諒の晩年である安政五年四月に和歌色紙を持参して、進上していることがわかる。贈られた年代から『御掛物帳』に所載される宗中の色紙とは、直諒の還暦祝いに宗中が記念に献上したものであると考えられる。

また、筆者の調査により小堀宗中筆溝口翠濤追憶和歌三首「雪月花」(個人蔵)の所在が判明した。この三幅対は、直諒没後に、宗中が次代の溝口家当主で新発田藩十一代藩主直溥(一八一九—一八七四)に贈った追憶和歌三首である。歌の為書には、在りし日の直諒との交友が茶会を交えて書かれている。

「花」幅の筆跡に注目する次のような記述がある。

文久二年弥生新発田

公に召されて花の御茶

賜ハリしにむかし

翠濤君の祝の御会

なそおかひ合ひかはらぬ

いつきしミのうれしさを

宗中

幾ちとせかはらぬ花をあふきても

きミのめくミの高きを今みれ<sup>①</sup>

「花」幅が書かれたのは文久二年（一八六一）以降、すなわち翠濤没後の三年以降かつ宗中七十六歳以降である。当時の新発田公は十一代藩主、直溥（一八一九—一八七四）である。文意から、直諒没後も直溥と茶の湯を通じた交遊があったことがわかる。その茶会と引き合いに出したのが、かつて宗中が招かれた直諒による祝いの会である。この会をも含め、次代の藩主である直溥とも交流できる嬉しさを詠んだのが、「幾ちとせかはらぬ花をあふきてもきミのめくミの高きを今みれ」である。文中の祝いの会とは、時期から考え先述の宗中が和歌色紙を持参したときに、還暦の祝いの会が開催されていたと考えられる。

以上のことから二つの盃は直諒が還暦の祝として、安政四年頃に胡民に依頼して作成したものである。また還暦の祝の会は、盃の記述から春先から初夏までの間に開催され、宗中が色紙を持参した四月十五日の会をさすものと考えられる。同年六月十八日に没していることから、直諒の最後の記念すべき会であったことが想像される。

### 三 胡民と白醉庵吉村観阿、妻観勢

ここで直諒と盃の作者である胡民の関係について、直接的な資料を確認できていない。胡民の師は原羊遊斎である。羊遊斎に関係した人物中、溝口家と最も関係が深い人物は吉村観阿である。観阿と溝口家を巡って近代数寄者で茶道研究をおこなった高橋箒庵（義雄）による『東都茶会記』（一九一六年）によれば次のような記述がある。

溝口伯爵家の先代にて翠濤と号したる君公の信任を受けしかば、溝口家の茶器は雑器に至るまで白醉庵の箱書せしもの多し<sup>②</sup>

記述から観阿は溝口家へ道具の取次ぎや鑑定を行ない、同家のコレクション形成にも大きく関与していたことがわかる。そのため観阿は溝口家に頻繁に出入りしていた。筆者の調査から、その交流は文政三年に道具を鑑定し、文政四年に正式に同家出入りを許されて

以降は頻繁に出入りしていた。観阿が取次いだ道具を、先出の『御掛物帳』で見ると「秋之部」には

一 東山公菊懷昏白醉庵取宗藏

とあり、このような掛物も観阿が溝口家に取次いでいたことがわかる。

従来、観阿と胡民の師である遊羊齋との関係については、観阿八十賀に際して「一閑桃之絵細裏」を百二十五個、羊遊齋に依頼して作成し、知友に配っていた。また観阿と羊遊齋を巡っては忘我逸人による「白醉庵すきものかたり」中に次のような記述がある。

更山は神田下駄新道に住居せり。此職人は観阿に於て世話いたしたる者なり。<sup>(13)</sup>

観阿が羊遊齋を知遇していたことがわかる。その後、羊遊齋は松平不昧の好みの道具を製作することともに酒井抱一（一七六一—一八二八）の下絵による蒔絵作品を発表していった。観阿は羊遊齋の良き支援者としての一面がみられる。

ここで観阿の妻である観勢について注目したい。従来、観阿については茶の湯道具の目利きとして著名であったが、妻観勢については資料の不足から全く注目されていなかった。筆者による研究で

は、天保十三年に観阿、妻観勢（田鶴）、息子信軸（弥山）の三者が、法隆寺円明院に弘法大師額の箱を寄進していることを明らかにした。<sup>(14)</sup>

観阿と妻観勢の墓は弘福寺にあり、その墓碑は西村貌庵（一七八四—一八五三）によるもので碑文中、観勢についてみると次のような記述がある。

妻観勢は浜松の藩士瀧原氏の女にして、名を田鶴といふ、貞操伶俐能翁が雅業を佐く。亦翁と共に仏法に帰依して、葛飾牛島弘福禪寺の鶴峰禪師を師とす。<sup>(15)</sup>

観勢は浜松藩士瀧原氏の娘で、名前を田鶴という。「翁が雅業を佐く」とあることから観阿の茶事、鑑定、取次ぎなどを内で支えた人物であったようである。また仏法に深く帰依したようである。弘福禪寺の鶴峰禪師を仏法の師とした人物であった。また碑文中、

今年翁齡八十四、観勢六十八、

とある。碑文の書かれたのは観阿の没した嘉永元年であることから観勢の生年は安永十年（一七八一）である。没年については相見香雨が『白醉葎芳村観阿』で、築地福泉寺の過去帳にある観勢の没年について

安政元年寅十二月二十八日<sup>(16)</sup>

と報告している。

観勢は夫同様に茶の湯道具の箱書などもしていた。というのも東京三越で開催された松平不昧の百年忌大展覽会がある。この展覽会の目録である『不昧公遺品展覽会列品目録』に東京の茶商、木全宗儀が所蔵した次の作品が紹介されている。

同<sup>(不昧)</sup>公宗<sup>(不昧)</sup>若宛之文箱書観阿妻観勢<sup>(17)</sup>

この作品は不昧による消息で、不昧と交流のあった牛尾宗若への消息である。宗若とはもともと上方の町人であったが、数度の火災にあい零落して隠者となった。その後、不昧に茶の湯を学んだとされる人物である。<sup>(18)</sup>その箱書が観勢とあることから、観阿の旧蔵品であったものに観勢が箱書をしたものと推測される。このように観勢の箱書も、当時の茶の湯文化では目利きで著名だった観阿の名とともに関心が高かったことがわかる。

観勢と胡民の関係を考える上で重要な資料がある。現在、東京大学史料編纂所が所蔵する溝口家史料のうち、同家の所蔵した盃の記録である『盃図録(全)』<sup>(19)</sup>がある。同書は安政三年(一八五六)に書かれたもので、図は新発田藩奥絵師であった林勝鮮(一八三一—

一八八八)、小書は直諒により書かれたものである。

同書には金または銀、もしくははその両方で砂子の蒔絵が施された盃(図6)が所蔵される。同書の直諒による小書きでは次のような記述がある。

此盃一ツ白醉庵観阿家内観勢年賀二上る也

この盃は観勢が年賀の品として、溝口家に献上した盃であることがわかる。<sup>(20)</sup>高台裏(図6-2)には

法橋胡民

とあり、胡民の作であることがわかる。なおこの盃について高尾曜氏の教示によれば『漆器図録』の附録として中山胡民作「村雲蒔絵盃」の図が個人蔵品として所載しているとのことであり、資料の提供を受けた。これは『漆器図録』第二十七号の附録で

村雲蒔絵之杯 植松包美君所蔵

とあり、胡民の高弟であった植松抱民(一八四六—一八九九)の子包美(一八七二—一九三三)の所蔵品であり、盃裏の図も『盃図録』と同一である。またその作品が村雲の蒔絵であったことが判明す



る。以上のことから観勢は賀寿に際し、「村雲蒔絵盃」を溝口家に献上していることがわかる。

ところで現在、個人が所蔵する胡民作「立鶴蒔絵香合」(図7)がある。この香合の全体は真塗となり一文字香合となる。蓋の内側部分に立鶴蒔絵が施される。鶴の頭部は朱で、羽の部分は銀、胴体を漆で蒔絵しており、やや侘びた印象を受ける作品である。鶴の横に胡民の署名と泉々の印も蒔絵される。

この香合を収納する箱甲には「立鶴香合」とあり箱裏(図7-2)には

#### 観勢(花押)

とあり、この花押が観勢のものであることがわかる。また箱底裏(図7-3)には

#### 百之内

の墨書があり先に述べた箱甲の筆跡と同一である。すなわちこの香合は観勢が胡民に百個作らせたうちのひとつである<sup>(21)</sup>。

夫観阿は天保十五年の八十賀に際し原羊遊齋に依頼して「一閑桃之絵細棗」を百二十五個作成し、同年に開催した茶会の記念品として知友に配布していた<sup>(22)</sup>。このことを念頭にあげば、この香合は観勢

が嘉永三年の七十賀古稀の祝として作成し知友に配ったものと考えられる。

観勢と羊遊齋に関係する作品では現在、個人が所蔵する原羊遊齋蒔絵酒井抱一下絵「三組盃」がある。これは酒井抱一が梅、笹の下絵を描いたものであるが一枚失われ現在は二枚のみが現存する(図8)。収納する箱裏の墨書(図8-2)には次のような記述がある。

#### 白酔庵

#### 観勢

#### 所持

この墨書は観勢によるもので、同人が所持していたことから、先に紹介した不昧消息宗苔宛と同様、夫観阿が所持した盃を観勢が所持していたものと考えられる。また箱墨書とともに、当時江戸で著名であった目利きの所有物として重宝とされたものと考えられる。

以上の事から観阿は羊遊齋に、観勢は羊遊齋の弟子である胡民に作品製作を依頼しており、その交遊があったことが確認できた。

## 四 むすび

木村茶道美術館と北方文化博物館が所蔵する胡民作盃は、直諒が安政五年の還暦を記念して作成されたものである。木村茶道美術館

蔵品の蒔絵にある寿の文字は、直諒の学書の師平林淳篤の筆によるものを蒔絵したものである。このことから直諒が胡民に製作依頼した時期は安政四年頃であったと判断される。

『盃図(全)』から、観勢は年賀の祝いに胡民作「村雲蒔絵盃」を溝口家に献上していた。このほか観勢は自身の古稀七十賀に香合百個の作成を胡民に依頼していた。これらのことから観勢と胡民の関係が確認できる。

羊遊斎とその弟子である胡民、そして観阿夫妻との関係を見ると、観阿は羊遊斎の若いころ支援していた。このことから後年は羊遊斎の弟子である胡民を観阿夫婦は支援していたのではないだろうか。今回の盃を通してみた場合、観勢と胡民の関係もあって、直諒は自身の還暦の祝として盃を胡民に依頼していたものと考えられる。溝口家の旧蔵品中、胡民に関係する作品では、明治三十九年に東京帝室博物館で開催された特別展覧会に新発田藩十二代藩主溝口直正(一八五五—一九一九)が出品した作品を『明治三十九年特別展覧会列品目録(丙)<sup>(23)</sup>』でみると

第二四三号 政子手箱写香合 胡民作 一個

がある。これらの作品も観阿、観勢、胡民との交流を通じて溝口家にもたらされたものと考えられる。

## 謝辞

本稿執筆にあたり調査にご協力いただきました木村茶道美術館、北方文化博物館、BSN新潟放送、新潟市美術館、遠州茶道宗家、東京大学史料編纂所、東京文化財研究所、日経BP未来研究所仲森智博氏、国立能楽堂高尾曜氏、個人のご所蔵家の皆様に深謝申し上げます。

## 註

- (1) 宮武慶之「白酔庵吉村観阿について」『日本研究』第五四集、国際日本文化研究センター、二〇一六年、三九—七七頁。
- (2) このような表装は、直諒の好みの表具であったと推測される。
- (3) 安政五年の元旦試筆では「試筆画卷」(北方文化博物館蔵)のうち三件が確認されるが、本幅もその一つである。
- (4) 肥田皓三、中野三敏編『三村竹清集(四)』、青裳堂書店、一九八三年、一〇六頁。同書所収の『近世能書伝』によれば淳篤について次のような記述がある。  
平林惇信の子惇徳も亦書を善くした。手近では不忍の弁財天の石灯籠の竿へ書いている。字は子孝、後惇徳を惇篤と改め、字も平甫とした。通称は父の名を襲いで庄五郎といひ、号は東岳、越水、巴陵、雪峯館などある。其印に「家在于東武萱園之東」とあるから茅場町の東寄りに住はれたらしい。著書に越水詩草一卷、越水印譜一卷、北遊草一卷がある。
- (5) 『幽清館雜記(卷十)』『東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料—325。』
- (6) 表具をみると、一文字、上下中廻すべて紙である。一文字は白地の

紙に銀を散らしたもので、楚々とした表具である。おそらくは直諒の好みの表具であったと推測される。

- (7) 宮武慶之「御掛物帳にみる新発田藩溝口家旧蔵の書画」『新潟県文  
人研究』第十六号、一五四—一九一頁。
- (8) 宮武慶之「閑極法雲・東澗道洵筆墨蹟について」『アート・リサー  
チ』第十四号、二〇一四年、八九—一〇四頁。
- (9) 宮武慶之「高麗堅手鉢子茶碗銘『白妙』について」『野村美術館研  
究紀要』第二十五号、二〇一六年、九九—一〇九頁。
- (10) このほか両者の合作作品としては大正十二年五月二十四日に東京美  
術倶楽部で開催された旧華族と旧家の売立目録である『毛玖呂具』で  
は
- 四九 宗中詩歌 共箱 横物 竪一尺八寸 巾一尺一寸一分  
五一 溝口翠濤侯 不二 宗中讃 横物 竪一尺一寸 巾二尺四  
寸
- の二件が直諒と宗中の合作作品として所載される。
- (11) 宮武慶之「溝口家旧蔵の茶道具拾遺」『文化情報学(第十一卷第一  
号)』同志社大学文化情報学会、二〇一五年、四五—六二頁。
- (12) 高橋箒庵『東都茶会記(第三輯下)』箒文社、一九一六年、一七一  
—一九頁。
- (13) 忘我逸人「白酔庵すきものかたり」『名家談叢』十四号、五〇頁。
- (14) 前掲註(1)宮武慶之「白酔庵吉村観阿について」。
- (15) 相見香雨「白酔茅芳村観阿」、中野三敏、菊竹淳一共編『相見香雨  
集(四)』青裳堂書店、一九九六年、二八八—三〇一頁
- (16) 前掲註(15)相見香雨「白酔茅芳村観阿」、二九一頁。
- (17) 高橋梅園「茶禪不昧公」宝雲舎、一九四四年、四五〇頁。
- (18) 安部鶴造「不昧公と茶の湯—改訂版—」今井書店、一九八〇年、一

六九頁。

同書に所収される不昧公茶書のうち、牛尾宗苔物語には次のような  
記述がある。

宗苔はもと上方の毫(ママ)富の町人にてありしか数度の火災に  
あひ追々零落して隠者となれり年は四十余也時君の懇意を受け夫  
より当君様の思召にかなひ御国へも両度御供したり元は千家を学  
日しか今は御弟子となれり

- (19) 『益図録(全)』東京大学史料編纂所蔵。請求記号溝口家史料—18  
9。

(20) 後述するように観阿は度々、溝口家に赴いているが年賀の挨拶を本  
人ではなく、観勢が赴いている点を見ると、病床にあったと推測され  
る。

- (21) 高野曜氏の教示によればこれまで同手の作品を三件確認され、その  
うち観勢による箱墨書がある作品はこの一件のみであるとのことであ  
る。

- (22) 前掲註(1)宮武慶之「白酔庵吉村観阿について」。

- (23) 東京帝室博物館『明治三十九年特別展覧会列品目録(丙之部)』一  
九〇六年、東京文化財研究所蔵、請求記号B03—1—1952。

ENGLISH SUMMARY

About Kotobuki-ji-sakazuki made by Komin Nakayama

MIYATAKE Yoshiyuki

Currently, the Kimura Sadō Culture Museum holdings a cup of Komin Nakayama (?-1870) work. Kotobuki of characters that are written in the cup is the handwriting of Jyuntoku Hirabayashi. A direct relationship of Noaki and Komin can not be confirmed. The person who was related to both was a Kan'a Yoshimura (1765-1848) couple. Kan'a had to sell a lot of art to Naoaki. Kana wife Kanse had conceded a cup of Komin work to Naoaki. Kanse was created hundred pieces of incense and ask to Komin. In the previous study were not disclosed friendship of Komin. In this paper, to clarify the production background of the cup from the friendship relations of Komin.

*Key Words:* Nakayama Komin, Yoshimura Kan'a, Yoshimura Kanse,

Mizoguchi Naoaki, Hara Y-o-yu-sai



図1-2 中山胡民作溝口直諒筆寿字盃（裏）  
（木村茶道美術館蔵）



図1 中山胡民作溝口直諒筆寿字盃（表）  
（木村茶道美術館蔵）



図1-3 中山胡民作溝口直諒筆寿字盃（箱墨書）  
（木村茶道美術館蔵）

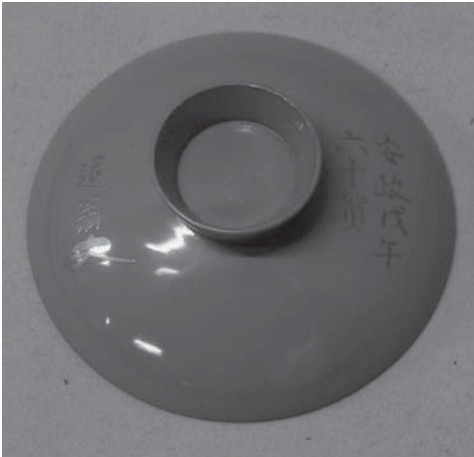


図 2-2 中山胡民作溝口直諒筆寿字盃 (裏)  
(北方文化博物館蔵)



図 2 中山胡民作溝口直諒筆寿字盃 (表)  
(北方文化博物館蔵)



図 4 盃と元旦試筆の比較

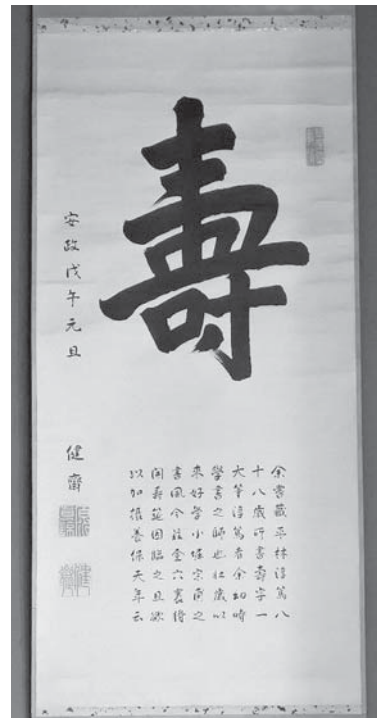


図 3 溝口直諒筆「寿」  
(個人蔵)

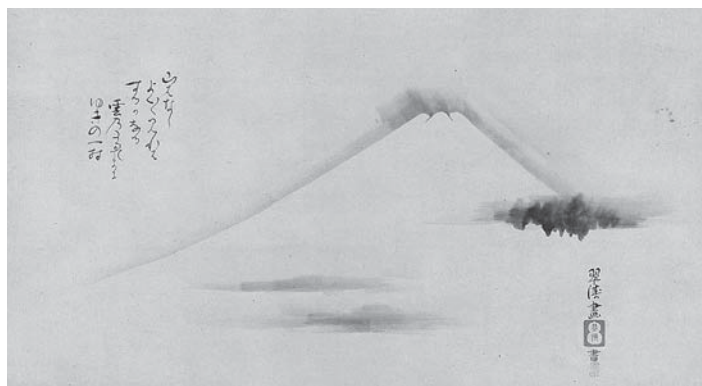


図5 溝口直諒、小堀宗中合作「富士絵讃」  
(BSN 新潟放送蔵／新潟市美術館寄託)

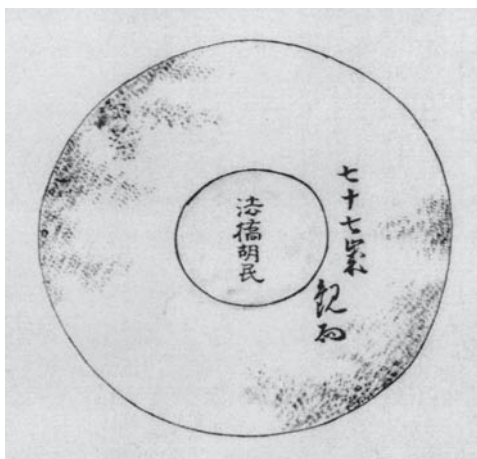


図6-2 中山胡民作盃（裏）

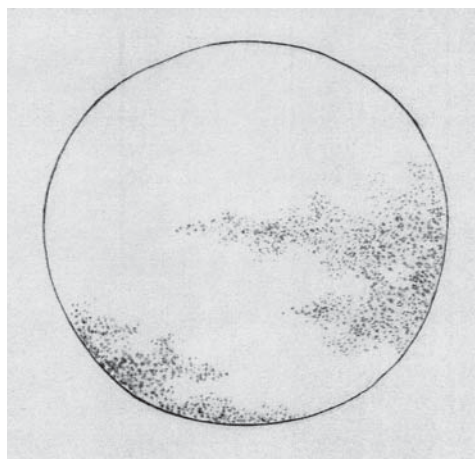


図6 中山胡民作盃（表）  
（「村雲蒔絵盃」）



図 7-2 中山胡民作「立鶴蒔絵香合」の箱裏  
(個人蔵)



図 7 中山胡民作「立鶴蒔絵香合」  
(個人蔵)



図 7-3 中山胡民作「立鶴蒔絵香合」の箱底裏墨書  
(個人蔵)





図8-2 原羊遊齋蒔絵酒井抱一下絵  
「三組盃」を収納する箱墨書（個人蔵）



図8 原羊遊齋蒔絵酒井抱一下絵「三組盃」  
（個人蔵）